眼　　科　　学
（旧・視覚病態学）

山本　修一

眼科学教室・最近35年間の歩み

鈴木　宜民教授（1955年７月～1975年３月）

千葉大学医学部が創立100周年を迎えた昭和49（1974）年は，在任20年に及ぶ第六代鈴木宜民教授の最後の一年に当たる。教室の勢いは最高潮に達しており，同年５月パリの国際眼科学会には石川清助教授以下５名が発表した。また安達恵美子助手が請われて，新設の浜松医科大学生理学助教授に栄転した。

昭和50年３月の第79回日本眼科学会総会において北沢克明講師が緑内障に関する宿題報告を行った。この宿題報告は開放隅角緑内障の薬物治療について臨床並びに実験的に詳細に検討したものであり，本邦の緑内障の研究に多大なる足跡を残した。鈴木教授は昭和50年３月をもって退官し，「白内障の過去と現在」と題する最終講義を行い，また長年にわたる功績に対して名誉教授の称号が贈られた。

石川　清教授（1975年５月～1984年３月）

昭和50（1975）年５月に石川助教授が教授に就任し，窪田靖夫講師が助教授に昇進した。石川教授は教授就任の翌年の昭和51年，第80回日本眼科学会総会においてシンポジウムを担当し，糖尿病網膜症における黄斑部病変とその対策について発表した。これは石川教授が鈴木教授時代より一貫しておこなってきた研究の集大成で，同疾患の成因および光凝固の臨床的意義に関して新知見を示した。糖尿病網膜症に関する研究は免疫学的・生化学的な基礎的研究から光凝固，薬物による治療，さらには分類まで幅広いものであった。また昭和55年の第84回日本眼科学会総会において「糖尿病性網膜症の病態と治療」の特別講演をなし，会員に多大な感銘を与えた。昭和51年北沢講師は東京大学角膜移植センター助教授に，能勢晴美助手は筑波大学眼科講師に栄転した。昭和54年には窪田助教授は富山医科薬科大学教授に，中村泰久講師も同大学助教授として赴任した。

昭和53年には新病院が落成し，旧病院は医学部本館，研究棟となった。石川教授は教室の整備に心を砕き，眼科先端機器を拡充し，現在の診療体制の基礎を築いた。昭和55年浜松医科大学の助教授として出向していた安達が本学助教授に戻り，翌55年５月第85回日本眼科学会総会が石川教授の下に千葉で開催された。さらに昭和57年３月には第200回集談会の記念行事を行い，同年10月には眼科学教室開講百周年記念祝賀会が医学部５階大講義室おいて行われた。折りしも，この年に鈴木宜民名誉教授が勲三等旭中綬章の叙勲を受け，このお祝いも兼ねて行われ盛大な会となった。石川教授は昭和59年４月をもって退官し，長年の功績に対して名誉教授の称号が授与された。

安達 恵美子教授（1984年５月～2003年３月）

昭和59（1984）年５月安達恵美子助教授が教授に就任した。国立大学臨床系における初の女性教授であり，テレビや週刊誌などに大きく取り上げられた。安達教授は昭和60年５月第23回国際臨床視覚電気生理学会（ISCEV）において「Facial and scalp field distribution of pattern evoked response in multiple sclerosis」の特別講演を行った。昭和61年６月に第３回関東眼科学会が安達教授会長の下で千葉で開催された。同教授は昭和63年７月ドイツ連邦共和国官邸（ボン市）にてウァイツゼッカー大統領よりシーボルト賞を授与された。これは日独の文化交流に貢献した学者に毎年一人に授与される賞で，1978年に設立された。このうち臨床医学の領域では２人目で，女性として初めての受賞であった。名誉ある業績の一つとして教室の歴史に残るものである。

平成元（1989）年５月，第93回日本眼科学会総会の宿題報告で安達教授は「目の老化── 視機能老化の客観的評価 ──誘発電位の語るもの」を発表した。この宿題報告は眼､脳も含めた高齢者における視覚の機能について，視覚誘発電位を指標として評価した結果をまとめたものであり，高年齢化社会となっている現代における老化の問題に大きな寄与をした。またこの発表に向けて，教室員は一丸となって研究に励み，その成果は多くの学位論文を生んだ。平成２年３月の国際眼薬理学会において，「Effect of dopamine on ERG and VECP in Parkinson's disease」と題する特別講演を行った。教室の研究は，視神経疾患網膜疾患に関する電気生理学的な研究が主体であるが，安達教授は組織学的な研究にも

関心を持って進めていたため，平成２年４月弘前大学から木村毅助教授が転任して以来，その方面の研究に関しても多くの成果があげられている。また同年，武田憲夫講師が富山医科薬科大学眼科助教授に，山本修一が同講師に転出した。

安達教授の福祉事業に対する業績も多大である。赴任早々，千葉県にアイバンクが無いことを憂い，昭和60年千葉県アイバンク協会を財団として設立した。角膜移植のため，昼夜を問わず，角膜提供者への医局員の派遣に努力した。

平成７（1995）年には国際網膜色素変性症協会（IRPS：International Retinitis Pigmentosa Association）の日本支部（JRPS：Japanese Retinitis Pigmentosa Society）を設立し，千葉大学眼科に事務局をおき，学術理事長として活動した。８年余に渡る熱心な国内外での活動により団体の内容を充実させ，2002年８月には，第12回国際網膜世界会議を主催した。アジア地域では初めての開催であった。その功績により，国際本部会長 Fasser 氏より賞状が送られ，また教室員一同の福祉活動は国際的にも評価されている。この間，平成10年１月に木村毅助教授が退官し開業された。平成12年に，後任として藤本講師が助教授に昇任した。

安達教授は，学術関係では国際臨床視覚電気生理学会副会長，理事として18年活動している。また昭和61年より厚生省特定疾患網脈絡膜調査研究斑の班員として活躍した。

そのかたわら，Vision Reserach，Clinical Vison Science，Documenta Ophthalmologica など国際誌の編集委員を務めるなど国際的にも活躍した。学会活動も，平成５年に第31回国際臨床視覚電気生理学会会長，平成８年に第36回日本神経眼科学会会長，平成11年に第103回日本眼科学会総会会長，平成14年には第12回国際網膜世界会議・第50回日本臨床電気生理学会会長などの重責を果たした。

教室の特色ある研究結果は，平成元年の第93回日本眼科学会総会の宿題報告「『眼と老化』 視機能老化の客観的評価── 誘発電位の語るもの ──」に続き，平成12年第104回日本眼科学会総会の特別講演において「視神経炎── 診断から視神経移植まで──」を担当，電気生理学的検査，画像診断から，視神経移植に至る視神経に関する当教室の集大成ともいえる講演を行い会員に感銘を与えた。これらはすべて，教室における網膜・視神経の機能研究の発展へ繋がっている。同年11月には日本医師会医学賞を授賞した。臨床面の発展もめざましく，常勤の関連病院は28と拡充し，医局員100余名と年々増加し，硝子体，網膜手術から，形成，眼腫瘍手術，角膜移植等全てを網羅するスタッフが育成され，年間1000件余りの手術件数を数えた。平成13年，大学院重点化に伴い教室の正式名称が「千葉大学大学院医学研究院神経科学研究部門神経病態学講座視覚病態学」に変更となった。いまだかつてこの長い名称を正しく覚えた者はいない。そして基礎系講座とも間違えられやすい名称は，後に「眼科学」に戻されている。

安達教授は平成15年３月をもって停年退官し，退官記念祝賀会がホテルニューオータニ幕張において，盛大に催された。また長年の功績に対して名誉教授の称号が授与された。さらに同年，紫綬褒章受章，日本女医会吉岡弥生賞受賞の栄に浴し，眼科学教室はお祝い続きとなった。

山本　修一教授（2003年４月～）

平成15（2003）年４月，安達教授の後任として，東邦大学佐倉病院眼科教授の山本修一が着任した。山本は昭和58年，石川清教授時代最後の入局者であるが，教授としての初仕事は，奇しくも着任５日前に逝去された石川名誉教授のご葬儀であった。

翌16年からは，国立大学法人化と初期臨床研修必修化が予定され，教室を取り巻く環境の激変がすでに予想されていた。この大波を乗り越えるべく，教室のミッションを「最高水準の眼科医療を提供するとともに，最高水準の医療を提供できる眼科医を育成する」と定めた。そして，千葉大学，富山医科薬科大学，東邦大学と様々な眼科医局での経験を活かし，教室の方針を臨床，特に手術重視に大転換し，年間の手術件数は一挙に1300件を超えた。しかし，独法化前の附属病院はそのような急激な変化に十分対応できず，診療経費や手術件数の急増にクレームが寄せられ，就任１年目から難しい舵取りを迫られた。

診療面では，圧倒的に需要の高い網膜硝子体疾患と緑内障を中心とする大規模な改革が進められた。網膜硝子体はさらに細分化させ，糖尿病網膜症，加齢黄斑変性，網膜静脈閉塞，網膜変性の専門外来を立ち上げ，全国的にも例を見ない体制とした。他に，緑内障，ぶどう膜炎，角膜疾患，斜視弱視の専門外来も立ち上げ，subspecialty を重視した診療体制となった。病床数や手術枠は従前通りであったために，入院期間の大幅短縮，網膜硝子体手術の局所麻酔化を進め，眼科の平均在院日数を７日以内に短縮した。また外来患者数がかつては年間60,000名に及び，これによる診療内容の希薄化が懸念されたため，近隣の医療機関の協力得て，新患は紹介状を必

須とし，病診連携を強力に推し進め，平成16年には42,000名までに圧縮，外来・入院での診療の高度化を達成した。平成22年度の年間手術件数は2,157件（附属病院の総手術件数の31.9％），年間外来患者数は新来3,478名，再来37,498名であり，関東はもとより全国から紹介患者を受けている。

また人事面では，新入医局員の激減と女性医局員の増加を受けて，関連病院の集約化を進めた。安達教授時代には毎年10名前後の新入医局員があり，関連病院は関東一円に拡大した。しかし平成15年は４名，その後２年間は初期臨床研修施行のため他施設からの移籍だけとなった。平成18年以降，初期研修を終えた世代の入局が期待されたが，かつての眼科入局バブルは全国的に弾け，千葉大眼科への新入医局は平成18年が３名，19年４名，20年１名，21年２名，22年３名と，５年間で計13名であり，そのうち男性はわずか３名となった。このため関連病院の再編成を行い，病院の規模が大きく患者数の多い国立国際医療センター，国立千葉病院，成田赤十字病院，君津中央病院，船橋中央病院，松戸市立病院を基幹病院とし，大学に準じた診療が行えるよう人員配置を行った。また女性医師の派遣の難しい千葉県外からは撤退を進め，県内に集約化した。これにより平成15年には30あった常勤派遣病院は，平成22年は21に減少した。

この間，平成16年に溝田淳講師が順天堂浦安病院助教授に栄転，さらに平成21年には帝京大学本院の眼科主任教授に就任した。また平成18年には水野谷智講師が帝京大学ちば総合医療センター眼科教授に就任した。教室の活性化を図るため，他大学からの人材登用にも努め，三田村佳典助教授が札幌医大から，菅原岳史講師が岩手医大から，馬場隆之助手が東京医科歯科大学から教室に加わった。なかでも三田村准教授の活躍は目覚しく，平成22年にはめでたく徳島大学眼科教授に栄転を果たした。

研究面では，毎年数名がコンスタントに大学院に進学している。当初は基礎系教室に指導をお願いすることもあったが，近年は大半の院生が附属病院で臨床を行いつつ，豊富な網膜疾患の臨床データを基にした臨床研究で学位を取得している。多忙を極める臨床の中で研究をまとめることは，院生にとってかなりの負担となっているが，臨床面で遅れをとらないというメリットはある。その一方で，じっくり時間を掛けて一つのテーマに取り組むという研究者としての育成の機会は失われつつあり，今後の課題となっている。学会関係では，平成19年11月に千葉で第48回日本産業・労働・交通眼科学会を，平成20年９月に東京で第56回日本臨床視覚電気生理学会を主催した（第44回日本眼光学学会総会と同時開催）。平成23年12月には東京で日本眼循環学会を主催予定である。

このように比較的順調に教室の改革と発展が進んできているが，将来への課題は山積している。高齢化社会の進行によりQOL維持のために，高度な眼科医療への需要はますます高まっている。地域医療への責任もあり，大学および関連病院により重厚な人員配置が要求される。その一方で，眼科への入局者急増は見込めず，教室員の半数以上を占める女性医師には，結婚・出産・育児・家庭とのバランスをとる必要がある。若い教室員には高度な診療能力の獲得だけでなく，研究者としての経験や海外留学の経験も重要である。道は険しいが，就任当初に定めたミッションを忘れずに，眼科を楽しめる・面白がる医師を一人でも増やし，社会に貢献して行かなければならない。

（やまもと　しゅういち）